

矜羯羅・制咤迦二童子開法要に於て、

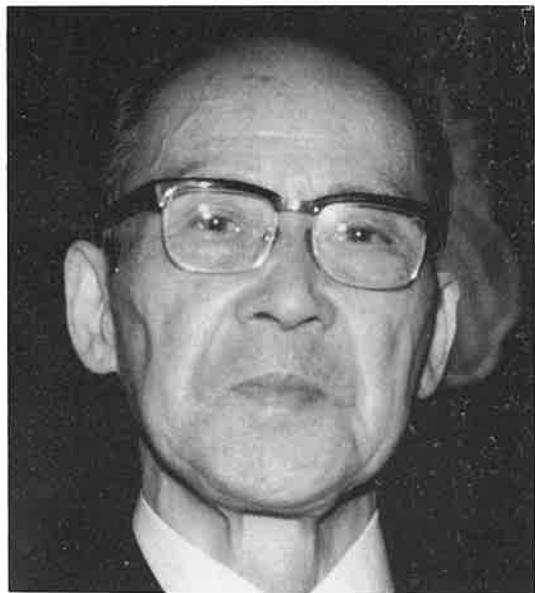
十一月二十八日

## 仏との出逢い

大仏師 錦 戸 新 觀

皆さん　おめでとうございます。

昨年九月頃に善光寺さまからお電話がありまして、『うちのお不動さまは、大変ご利益があります。この度御告によつて、矜羯羅・制咤迦の二つの童子を創つていただきたい』とおっしゃるんです。私も年をとつて、めんどうな仕事は遠慮させていただいているんですが、『御告によつて』という言葉に考えてしまいました。



御告おつけに依るということは、仏さまのお言葉であるということです。仏さまがおつしやるのですから、これは何としても創らねばなりません

ん。創らせていただかなくてはならないと思いまして、それでは是非やらせてくださいと、申し上げました。



二七  
卷





早速、奥さまと一緒に一緒にお見えになられまして、あらためて、靈験あたたかなご本尊さまのお話を伺いました。

ご本尊さまに、少しでも似ていなくてはなりませんし、仏像を作るには約束事もございますから、一度拝見させていただこうと思いまして、こちらへお参りに参つたわけでございます。

方丈様のお話しを伺いますと、とても並のご信頼ではありませんし、事実、わずかの間にこの大寺院が作られたわけです。とりわけ、私が一番心魅かれたのは納骨堂でございます。およそ納骨堂というところは淋しいところです。ところが、私がこちらの納骨堂に入りますと、"ああ、こここの仏さまは救われているんだなあ"と感じました。だからここまで発展なさつたのだと感じたのです。

こうしてご本尊さまを拝ましていただきて、想を練り、出来上がつたわけですがれど、私は、



自分が創ったとは思ってないんです。みんな仏さまが私の手を通して創らしてくれてますんだなと思うのです。あとを振り返ってみると、そんな形跡がたくさんござります。だから私は大仏師という言葉は嫌いなんです。私はまだ充分に満足する仕事は出来ていませんから。いつも大工だと思っています。本当に自分の仕事というものはどういうものであるかと考えています。ですから私は年中、絶え間なく悩んでいるんです。

若い頃は、こちらの山からあちらの山へ空を飛ぶ夢をよく見ましたが、今は、大きな荷物を背負つて山を登る夢なんです。そしてフーフーいいながら帰る道がわからないのです。ということは、まだ私の中にあれやこれやというものが残っている。荷物になつていてるんですね。梦ぐらいはもう少し楽な夢を見たいものだと思いますが、それが潜在意識となつていてるんです。



これは、仏さまが私の手を通して創つてくれた  
きつているということだと思うのです。

第七回の個展を機会に、「仏との出逢い」という本を出しました。これは、昭和十九年から私が時折に書いた詩や歌をまとめたものですが、まとめるにあたって年表を見ましたら、どうしてこんなに仕事ができたんだろうかと思うんです。やっぱり仏さまが、創らせてくれたんだなあ。しかし、私の作品に点数をつけたら、七十点か八十点です。そういうわけですから、決して私は、自分自身がうまいとは思っていません。ただ真心をこめて彫るだけあります。仏さまのあしたに念じ夜に念じ、仏さまを離れず、仏さまと一緒に制作している状態であります。

この度このような、善光寺さまという素晴らしいご縁をいただいたというのも、すべて仏さまのお手配であろうと思います。

これからこのお不動さまのうしろに（佐藤御

老師からお話がありましたように、大日如来の化身でありますから）今この大日如来を制作中であります。来年の今頃は、おそらく出来上がる予定でありますけれど、無相の法身虚空同体といふすごいお方ですから、お経の中にもありますように、信心が深ければ深いだけのご利益、浅ければ浅いだけのご利益ということが説かれていますから、みなさまが本当に心をこめて念願なされば、必らず願いはかなえられると思します。

おわりに臨みまして、善光寺さまの益々のご発展と、みなさまのご健康とお幸せをお祈りして、挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。